

人々の生活権 を守る

地域生活指導へのアプローチ

3 若者自立支援の現場で

「ひきこもり」「ニート」よばれる 若者たちのかかわりあいの中から

特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク 若者自立支援事業統括責任者

藤井

智

若者の「自立」に向けた「困難状況」の中、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、内閣府による「若者自立・挑戦戦略会議」が取りまとめた「若者自立・挑戦プラン」（二〇〇三年六月）をうけて、二一世紀に入ってから「若者自立支援」のとりくみははじまっている。

私たちの法人も、厚生労働省「若者自立塾」（二〇〇五年年度）、「地域若者サポートステーション」（二〇〇六年年度・当法人の受託は〇七年度）の委託を受け、東京都三鷹市を拠点に活動を進めている。また、二〇〇八年度は東京都が独自に展開する「東京都若者社会参加応援ネットワーク」の運営と、不登校の子ども・青年たちのフリースクール「コスモ」の運営を中心に展開してきた。

行うネットワーク）にてフリースペース運営の委託を受けている。
本稿では、委託事業を中心とした当法人の若者自立支援プログラムについて、事例を交えながら紹介し、「若者の自立支援」とはどういう事なのかを考えあいたい。

● NPO 法人文化学習協同ネットワークの運動

一九七〇年代にはじまった私たちの運動は、子どもたちの学力保障を目的にした学習教室「文化学習センター」の運営と、不登校の子ども・青年たちのフリースクール「コスモ」の運営を中心に展開してきた。

一九九〇年代後半にはいると、青年期の教育相談がもちかけられるようになり、また、コスモで育った若者たちの「次」をどうするかという問題意識から、しだいに「若者支援」の取り組みをはじめようになる。

しごこの世界への「つながぎ」を意識した連続講座「スクール・トゥ・ワーク・セミナー」では、様々な業種の職業人をゲストに迎え、そのしごとに至るまでの経緯やしごとの上での困難、そして喜びについて語ってもらい、ゲストの職場を見学し、ときには体験させてもらった。

「新しい生き方・つながり発見マガジン」と銘打った季刊雑誌『カンパネラ』は、若者たち自身が企画編集をし、プロの編集者の指導・援助を得て出版され、書店にも並んだ。

そういった取り組みを通じて就労やアルバイトに向かった若者たちは、しかし、傷ついて戻ってくることも多くあった。「働くことそのものの体験を、失敗が許される場で出来ないか」「自分のはたらきが、いいこと」につながっている実感をもちながら、はたらくことや人や社会に対する信頼を回復できるような仕組みを作れないだろうか」と、強く思うようになってきていた。私たち

は次第に「働く現場で働くことを学べる場」を意識するようになる。そして二年近くの準備期間を経て、二〇〇四年九月、「コミュニティベーカリー「風のすみか」」を開設した。

「風のすみか」は「①若者が働くことを学び、学ぶことを通じて働く場、②手間暇かけて作った美味しいパンを提供するパン屋、③つくる人と食べる人が共につくる、地域の顔の見えるパン屋」という三つのコンセプトをもった、全品天然酵母のパン屋だ。

パンの製造から販売まで様々な仕事があり、その仕事の過程ひとつひとつに、たくさんのお客さんがある。同じような困難や悩みを持つ同世代との出会い、自分を支えてくれるスタッフやボランティアとの出会い、「すみか」を愛してくれるお客さんとの出会い、「安全な食べ物」への思いをもつ生産者たちとの出会い、そしてそういう中で成長していく自分との出会い。そうして、若者たちの社会がだんだんとひろがっていき、より豊かな社会参加へと向かっていくことを目指している。

● 孤立を越える

「風のすみか」開設翌年の二〇〇五年、厚生労働省「若者自立塾」事業がはじまった。「三ヶ月で終了の合宿型プログラム」であるという「期間の問題」や「成果の数値目標」等、支援現場の経験に基づき熟考すべき問題は多々あるのだが、「受益者負担の自己責任」で若者の支援をすることに限界を感じていた私たちも企画競争に参加し、受託することとなった（「若者自立塾」は〇八年度、全国に二九カ所）。二年後には若者の総合的な相談窓口である「地域若者サポートステーション」（二〇〇八年度で全国には七七カ所設置されているうちのひとつ）を受託する。〇八年度は、東京都「コンパス」の事業も受託している。

相談に訪れる若者にとって、孤立をいかに越えるかというところが、まず第一の課題になっている。「ひきこもり」や「ニート」状態の若者たちが、いかに孤立無援であるか、そしてそれが彼らをいかに無力化させているか、若者支援事業のスタッフは日々実感している。

二十歳になる直前に「息子を若者自立塾に入塾させた」ということが、まず第一の課題になっている。「ひきこもり」ということが、まず第一の課題になっている。「ひきこもり」や「ニート」状態の若者たちが、いかに孤立無援であるか、そしてそれが彼らをいかに無力化させているか、若者支援事業のスタッフは日々実感している。

● 関係性の困難と「自分という存在」

若者たち自身が自分の「困難さ」として十中八九言葉にするのが「人間関係の苦手さ」であり、もうひとつは「自分が何をしたらいいのかわからない」ということだ。私たちの支援活動はまた、彼らが人や社会に対しての信頼を回復すること、そして自分という存在を意識し、主体化することを目指すことも課題となる。

リョウヘイは大学不登校ひきこもりの経験を持つ。自立塾への入塾は母親に紹介されて「今の生活から逃げたかったから」。「自立塾に在るだけの現状、塾に居場所を

い」と母親に連れてこられたタカノリは、あきらかに嫌々来ているようであった。三ヶ月の塾生活と若干のフオーアップ期間の後、ハローワークの紹介でIT関係の会社に就職していったのだが、彼は私たちの所に連れてこられた当時のことを「周りが真っ黒に塗り固められているみたいだった」と表現する。

アトピー性皮膚炎にコンプレックスを感じるタカノリは、自分を主張できるのは勉強だけと言わんばかりに中学校までは必死に頑張ってきたのだが、高校時代にととう「息切れ状態」になってしまい、大学受験がうまくいかなかったことでひきこもりの生活に入る。両親、とくに父親との関係も悪くなり、日中は自室から出られない状態だった。「何とかしなくちゃ」とは思うのだが、一体なにをどうすれば「何とかなる」のか、皆目見当がつかなかったという。それでも唯一自室に在ること、自分の最低限の「安全」を守っていたのだが、母の強いすすめがあり、いつまでも自室にこもっていることもできなくなり、「やけのやんばちで」私たちのところに連れてこられた。

「若者自立塾」に来て彼がすぐわれたのは、「なんかよ作りたけいけど対人不安もあつてどうせ作れない現実」から逃れるために、自分の苦手な対人関係がより少なくなると思える金属加工の工場でのアルバイトとして就労し、アパートをかりて卒業していった。やがて職場の人間関係に入り込めないことに苦痛を感じはじめ、一年ほどすると「工場を辞めたい。以前他の子がやってた、NPOの職員研修生」として受け入れてくれ」と言い出すようになる。

私たちは、工場を辞める辞めないは別にして、本当に「職員研修生」として受け入れてほしいなら、今までの自分と今後どうしたいのかを丁寧に記述してレポートするようにと課題を出した。この「レポートを作成すること」を柱に定期的に面談するようにした。そしてこの「レポート作成」も終盤に入る頃、リョウヘイは職場の部長に「退職したい」と申し出た。

「今日は部長に『退職します』と言うんだ」と決めた日はものすごい緊張感だったが、「今日はこれをやるんだ」ということがあるだけで、通勤の道のが少し違って見えたと言う。ところが部長は「君の言うことは分からなくはないが、じゃあ自分はどうしたいのかが全然分から

ない。一体何がしたいの？」と一蹴。自分の思いを意識することなく「イマ・ココじゃない、ザニカ」ばかりに逃避してきていた自分を意識させられた。

私たちは、安易に結論は出さず、今度はやはりリョウヘイに真剣に悩んでもらおうと決めていた。「部長には言ったけど納得してもらえなかった」と「レポートづくり面談」でボソボソと話す彼に、「職員としての研修だつて、君にとつてそうそう楽なものじゃない、かなり厳しいものになるはずだ」と「追い打ち」をかけた。

彼は部長に何度も掛け合い、そのたびに彼の退職願いは却下された。時には緊張してしつかり話せないからと言いたいことを紙に書いて行つた。時には「今辞めたいと思つている現実を、越えるべきハードルだと思え」と言われて逆に更に納得したりした。そしてそのたびに「面談」の中で、部長に言われたことと自分の思いを振り返り、時としてスタッフに「追い打ち」をかけられた。

ところが彼はそのうち、これらのやりとりを「はじめ自分が主体的に動いている」と言うようになる。そして彼は部長と私たち職員を評して「大人と呼べるような

人にはじめて会つた」とレポートに書いた。そして「辞めたい辞めたいばかりで現状から目をそらし続けていたころに比べてだんだんと足下が見えるようになった」と言う。

同時に彼の「仕事以外」の時間も充実してきた。今まではただ「機械のように」働いて、食事をして、寝るだけという生活だったのだが、自立塾の寮で、現役の塾生と一緒に食事を作つて食べて帰る曜日をもつようになり、また「文化学習センター」でスタッフのボランティアをはじめた。そして週に一度、自分の好きな将棋をやる時間と仲間を見つけて、遅くまで楽しんでる。

やがて「ただやけくそに辞めたい辞めたいと思つていた気持ちがおさまつてきて、もうちょつと続けてみようかな」と思うようになってきた。そして、「この一連の毎日はかなりしんどかつたけど、なんだか楽しかつた気がする。いつも他人のことばかりを意識しすぎて自分を無視していたけど、今回は、主体的に動く」ということを垣間見せてくれた。結局は自分で決めたと言うよりも、部長に説得されたみたいな形で職場に残ることになったけど、こういうことを積み重ねないと自分で決断できる

ようにはならないだろうから、今はこれでいいやと思う」と「レポート」に記述し、一端このレポートを締めている。

リョウヘイにとつて、ある必然性をもつて、「手応えのある他者」があらわれて、「手応えのある現実」が立ちだかつたと言つことなのかも知れない。そしてその中ではじめて、「自分という主体」が見えてきて、それを「楽しい」と、リョウヘイが感じたと言つことなのだろうか。

●「若者を支援する」とはどついつことなのか

若者の自立支援の施策は、一方で「個人が（自分の責任で）エンプロイアビリティを高めなさい、そのためのある程度の援助はします」といった傾向のものが多い。

「カウンセリング・セミナー型」とでもいつたらよいだろうか、個人の「職業意識の涵養」であり、個別の「適職の発見」であり、個人の「スキルの獲得」を目指すものだと述べて良いかと思う。私もこういう支援を一概に否定するものではない。局面においては重要な役割を

果たすであろうと思う。

たまたもう一方で大切にしたいことは、若者たちがどういう社会と出会い、どんな社会を制作していくのか、ということだ。そして私たちは、その中でどうやって自分という存在を立ち上げていくのかということを意識しているのだ。

そして、そのフィールドは「カウンセリングルーム」や「研修センター」というものにとどまらず、社会そのものである必要があるだろう。あわよくば「いい人」「良い職場」「良い社会」と出会うことで、若者たちの中に「人つてもに生きるに値するな」「社会つて生きていくに値するな」、ひいては「自分つて生きるに値する人間だな」ということをたくさん感じてほしいと願っている。

